

“自由”とは何か

——自由に生きるための社会構想

苦野一徳 熊本大学教育学部講師

◆ はじめに

「人間的欲望の本質は自由である」。そう言ったのは、19世紀ドイツの哲学者G.W.F.ヘーゲルだ¹⁾。

ただ本能のままに生きている動物とは違って、人間は必ず「自由」に生きたいと思う。そしてわたしたち人類の歴史は、この「自由」を求める戦いの歴史であり、またその結果、多くの人びとの「自由」が実現していくプロセスにほかならない。そうヘーゲルは主張した。今なお世界で続く様々な革命や政治運動を見るにつけ、ヘーゲルの慧眼を思わずにはいられない。

さて、しかしその一方で、現代のとりわけ先進国に生きるわたしたちにとって、「自由」の価値はずいぶんとリアリティを失っているように思われる。むしろそれは、どこか忌避されるくらいさえあるようにも思われる。

理由は大きく二つある。

一つは、現代のわたしたちが、過剰な「自由」の中で、むしろひどい「不自由」をしばしば抱えてしまっている点にある。どう生きても「自由」だ、と言われると、わたしたちはかえって、どう生きればいいのか分からなくなってしまうことがある。政治的「自由」や生き方の「自由」を手に入れた今、わたしたちはむしろ、現代ドイツの哲学者アクセル・ホネットが言うところの、「自由であることの苦しみ」を抱えてしまっているのだ。

もう一つの理由は、過酷な「自由」競争社会の中で、わたしたちがしばしばひどくみじめな思いを抱かされてしまっているという点にある。「自由」の名のもとに繰り広げられる苛烈な競争を続けてきた結果、わたしたちの社会は、今や深刻な格差社会へと至ってしまった。「自由」は時に「平等」を破壊する。よく知られた、自由と平等のアンチノミー（二律背反）である。

こうして現代において、「自由」はわたしたちにとってもはや最高の価値ではなく

なっている。それはむしろ、わたしたちを苦しめるものですらあるのだ。

そこで今日、多くの思想家たちは、「自由」に代わる新たな人間の価値を探求するようになっている。たとえば、もはや「自由」ではなく、その場その場の“動物的欲求”や快楽を満たすことこそが幸福であるとする「動物化」の思想。あるいは、「自由」よりもなお一層崇高(?)な、「他者の絶対的尊重」や「正義」の理念に活路を見出そうとする思想……。

しかし、「自由」はほんとうに、今日もはや時代遅れの価値なのだろうか？

わたしはそうは考えない。今日においてもなお、人間が人間である限り、「自由」はわたしたちにとって最高の価値である。そして、先述した「動物化」も「他者」も「正義」も、わたしの考えでは、むしろ「自由」に包摂される概念なのだ。

なぜそのように言うことができるのか？ 以下ではそのことを論証しながら、「自由」な社会はいかに可能か、その原理を提示することにしたいと思う。



1. 自由とは何か

「自由」とは何か。古代から現代にいたる

まで、これは繰り返し議論されてきた問いだ。

それら様々な議論を踏まえた上で、哲学史上最も完成度の高い「自由」論を展開したのは、わたしの考えでは冒頭にも紹介したヘーゲルである。そこで以下、まずは彼の「自由」論の概要を紹介したいと思う。独自の術語を駆使した、哲学史上最も難解な哲学と言われるヘーゲルの思想だが、わたしなりにできるだけ噛み砕いて、そのポイントを明らかにしたい。

ヘーゲルはまず次のように言う。

自由、と言うと、人はまず、「何でもやりたい放題ができること」とか、「あらゆる束縛から解放されていること」とかいったことを思い浮かべる。しかしわたしたちは、そのような「自由」を「自由」の本質と言うことは決してできない。

なぜならそれは、単に頭に思い浮かべられただけの、現実にはあり得ない「自由」であるからだ。

ヘーゲルは言う。人間は、だれもが多種多様な欲望を持っている。そしてまさにそのゆえにこそ、わたしたちはこれらすべての欲望を叶えて、「やりたい放題」ができることも、またこれらすべての欲望から「解放」されることも不可能なのだ、と。

さらに言えば、わたしたちの欲望は時に互いに対立し合う。おいしいものを食べた

い、でも太りたくはない。人に愛されたい、でも自分を曲げたくはない。夢を叶えたい、でも努力したくない……。こうした、互いに対立し矛盾し合う無数の欲望を持っているがゆえに、わたしたちは、これらすべてを叶えることも、またこれら欲望の一切から解放されることもできないのだ。それゆえヘーゲルは、「自由」とは「やりたい放題」のことでも一切の束縛からの「解放」のことでもないと言う。繰り返すが、このような「自由」は、単に頭に思い浮かべられただけの、現実にはあり得ないものであるからだ。

しかしその一方で、わたしたちは、日常生活において「自由」を現実実感することがある。とすればわたしたちは、そのような現実的な「自由」の本質をこそ洞察しなければならない。

では「自由」とはいったい何か？

それは、わたしたちが、さまざまな欲望の「制限」の中にあることを自覚しつつも、なおその制限を乗り越えた時に実感されるものである。“欲望という諸制限”の乗り越えの感度。ヘーゲルによれば、これこそが「自由」の本質なのだ。

さらにヘーゲルは、冒頭でも言ったように、人間はこの自由の“感度”を必ず求めてしまう存在であると言う。

なぜか？次のように考えてみると分かりやすいだろう。

先述したように、わたしたちはだれもが必ず無数の「欲望」を持っている。そして人間は、動物とは違ってこれら自らの「欲望」を深く自覚できる存在である。そしてそれゆえにこそ、わたしたち人間は、その生において本質的に「不自由」を感じてしまう存在なのだ。

愛されたい、でも愛されない。裕福になりたい、でもなれない……。こうした欲望の満たされなさは、“欲望という制限”の中で感じる「不自由」感である。そしてわたしたちは、まさにこのような制限の中に絶えず投げ入れられているからこそ、この制限を乗り越えたいという「自由」への欲望を不可避免的に抱いてしまうのだ。

まさに「人間的欲望の本質は自由」なのだ。わたしたちは、わたしたちが欲望存在であり、そしてそのことを自覚している限り、これら欲望の制限から「自由」になりたいと願わずにはいられないのだ。



2. 自由をめぐる戦いの歴史

しかしそのゆえにこそ、人類はこれまでの歴史を通して、絶えず命を奪い合っ

た。ヘーゲルはそうに言う。他者の存在は、わたしたちの諸欲望の実現を妨げる、最も根源的な制限であるからだ。

この洞察は、今日改めて注目されるべきものだ。哲学は、物事や問題の“本質”を洞察することで、その問題を最も根本から乗り越えるための“原理”（考え方）を提示する営みだ。そしてわたしの考えでは、ヘーゲルは、人間同士の争いの“本質”を洞察することで、この問題を乗り越えるための“原理”（考え方）を力強く提示したのだ。

人間が争いをやめられない理由、それはまさに、わたしたちの欲望の本質が「自由」であるからにほかならない。

よく知られているように、人類がそれまでの狩猟採集生活から定住・農耕・蓄財の生活へと徐々に移行していきようになったのは、約一万年前のことである。そしてこのいわゆる「定住革命」「農業革命」は、人類の「進歩」のきっかけを作った最初の大革命であったと同時に、その後現代にまでいたる、長い戦争の歴史の始まりであったとも言われている。

蓄財の始まりは、その奪い合いの始まりでもあったのだ。人類は約一万年前より、いつ果てるとも知れない戦争の時代に突入した。17世紀イングランドの哲学者ホブズの言葉を借りれば、「万人の万人に対する

戦い」が始まったのだ。

この拡大し長引く戦いに一定の終止符を打ったのは、歴史上、まず最初は古代帝国の登場だった。エジプト諸王朝、秦王朝、ローマ帝国など、大帝国の登場が、戦争を抑止し秩序をもたらしたのだ。

しかし言うまでもなく、これら帝国もまた、次の新たな帝国に打ち滅ぼされていくことになった。

なぜ、人間だけがこのような戦いをやめられないのか？繰り返すが、それはわたしたち人間が、「自由」への欲望を本質的に持ってしまうからだ。

動物同士の争いの場合、勝敗が決まればたいていはそれで戦いは終わることになる。それはおそらく、動物たちが「自由」に生きたいなどとは思っておらず、むしろ自然によってそのようにプログラムされているからだろう。

しかし歴史上、人間は多くの場合、負けて奴隷にされて自由を奪われるくらいなら、死を賭してでも戦うことを選んできた。奴隷の反乱の例は、歴史上数え切れないほど多くある。現代においても、わたしたちは自由を奪われた人びとの戦い——アメリカの公民権運動や近年の「アラブの春」など——を目撃し続けている。

要するに人間は、自らが生きたいように

生きたいという欲望、つまり「自由」への欲望を本質的に持ってしまうがゆえに、この「自由」を求めて、相互に争い合い続けてきたのだ。

もちろん、戦争の理由は時と場合によってさまざまだ。食料や財産を奪うためだったり、プライドのためだったり、憎しみのためだったり。しかしこれらすべてに、実は「自由」への欲望が横たわっている。「生きたいように生きたい」からこそ、富を奪い、プライドを守り、憎しみを晴らしたいと思うのだ。そして、富を奪われたら奪い返したいと思い、プライドを傷つけられたら傷つけ返したいと思い、憎しみはまた新たな憎しみを生んでいく……。すべて、「生きたいように生きたい」という「自由」への欲望のあらわれなのだ。



3. 「自由の相互承認」の原理

この戦いに終止符を打つための“原理”（考え方）はあるのだろうか？これがヘーゲルの次の問いである。

ある、とヘーゲルは言う。彼がたどり着いた結論は次のようだ。

わたしたちが「自由」になりたいのであれば、「自分は自由だ、自由だ！」などと、

素朴に自分の「自由」を主張するのではなく、あるいはそれを力づくで人に認めさせようとするのでもなく、まずはいったん、お互いがお互いに、相手が「自由」な存在であることを認め合うほかはない！

どんなに強大な力を持った人も、自分の「自由」を人に力づくで認めさせ続けることは、長い目で見ればほとんど不可能なことだ。どんな帝国も、どんな君主も、その権力を永続化させようとすれば、それを阻む勢力によって必ず打ち倒されてきた。そしてそのたびに、激しい命の奪い合いが繰り返されてきた。

だからこそ、わたしたちは、自分が「自由」になるためにこそ、他者の「自由」もまた、つまり他者もまた「自由」を求めているのだということを、ひとまずお互いに承認し合う必要がある。そしてその上で、互いの承認と納得が得られるように、その「自由」のあり方を調整する必要がある。そうでなければ、わたしたちは互いの「自由」をただ主張し合い続けるほかなくなって、いつまでたっても「自由をめぐる戦い」を終わらせることはできないだろう。

これを「自由の相互承認」の原理と言う²⁾。わたしの考えでは、今なお最も根本的な、社会の「原理」というべき考え方である。

もしもわたしたちが、互いに命を賭して

自由を主張し合う戦いを終わらせたいと願うのならば、この「自由の相互承認」の原理に基づいて社会をつくっていくほかに道はない。もちろん、この原理を完全に実現するのはきわめて困難なことだ。実際、この原理がヘーゲルをはじめとする近代哲学者たちによって見出されてから200年、人類は今もなお、凄惨な命の奪い合いを終わらせることができていない。

しかしそれでもなお、わたしたちが互いに命を奪い合うことをやめ、自らができるだけ「自由」に生きていけるようになるためには、この「自由の相互承認」の原理を共有し、そしてこの原理を、どうすればできるだけ実質化していけるかと問うほかに道はないはずだ。

これが、人類一万年の争いの歴史を経て、わたしたちがついにつかんだ社会の「原理」なのだ。



4. 「他者」から「自由」へ

「自由の相互承認」の原理は、今日ではもはや「当たり前」の原理になっていると思われるかもしれない。しかし残念ながら、わたしの考えでは、現実的にもまた哲学的にも、これはまだまだ十分「当たり前」の

考えになっているというわけにはいかない。

ヘーゲルは、人類の歴史とは「自由をめぐる戦い」の歴史であり、そしてまた、この戦いを通して、万人の「自由」が実現されていく歴史であると考えた。

しかし、今日における世界規模の格差や戦争、テロリズムなどを目の当たりにすると、ヘーゲルの夢はまだまだ実現にはほど遠いように思われる。万人の「自由」が実現されるどころか、一部の人の「自由」のために、大多数の人の「自由」が奪われてしまっている現状がある。

そこで今、多くの現代思想家たちは、先述したように、「自由」に代えて「他者」や「正義」を掲げる社会思想を打ち出すようになっている。誤解を恐れずひと言で言えば、他者の思想における「正義」とは、わたしの「自由」を主張することなしに、むしろ「他者」を絶対的に尊重することにある。

しかしわたしには、これもまた、「自由の相互承認」が、哲学者たちの間でさえ「当たり前」の原理になっていない一つの証左であるように思われる。

キルケゴールの言葉が思い起こされる。「すべての真理は、ある限度までしか真理ではない。行きすぎるとそれは非真理に転ずる」。わたしの考えでは、「他者」やその絶対尊重を「正義」とする思想家たちは行きす

ぎてしまったのだ。

ヘーゲルは、「自由の相互承認」へと行きつく前段階の思想を、まるで今日を予言するかのようにすでにいくつも描き出している。

その一つに、「徳の騎士」と彼が呼ぶものがある。あまりにひどい社会の現状を目の当たりにした時、わたしたちはその反動や道徳的な憤りから、思わず何らかの価値を特権的に打ち出したくなってしまう傾向がある。

「他者」の思想は、多くの場合そのような思想であるようにわたしには思われる。崇高で美しい理想ではある。しかし同時に、非現実的で反動的な理想と言わなければならない。

人間は、どうしても「自由」を求めざるを得ない存在である。その欲望を、わたしたちは否定するのではなく、まずは受け入れる必要がある。そしてその上で、互いの自由を承認し合うルールを共有する。「正義」とは、一方的な他者尊重のことではなく、以上述べてきた「自由の相互承認」にこそあるはずなのだ。



おわりに

社会の根本原理が「自由の相互承認」であるとするなら、次の問いは、ではこの原

理を、いったいどのように具体的に“実質化”していくことができるかというものになる。とりわけ今日においては、一国内だけでなく、どうすればこの原理を世界的に共有していけるかを真剣に問い合う必要がある。

法、教育、福祉、経済。さまざまな領域の叡智を結集することが求められている。

※本稿は、拙著『自由はいかに可能か——社会構想のための哲学』（NHKブックス、2014年）および『教育の力』（講談社現代新書、2014年）の内容をもとに新たに書き下ろしたものである。

- 1) 原文は「精神の本質は自由である」だが、ヘーゲルの意をくんで、このように言い換えても間違いではないだろう。
- 2) この言葉は、ヘーゲルの「相互承認」の哲学を再構築した竹田青嗣によって提示されたものである。竹田青嗣『人間的自由の条件——ヘーゲルとポストモダン思想』（講談社、2004年）参照。

プロフィール.....

とまの・いっとく 1980年生まれ。哲学者・教育学者。早稲田大学大学院教育学研究科博士課程修了。博士（教育学）。現在、熊本大学教育学部講師。主な著書に、『自由はいかに可能か——社会構想のための哲学』（NHKブックス）、『教育の力』（講談社現代新書）、『勉強するのは何のため？——僕らの「答え」のつくり方』（日本評論社）、『どのような教育が「よい」教育か』（講談社選書メチエ）などがある。